

2014年度入試の概観

- 18歳人口 前年から4万人減の118万人
- センター試験 文理で明暗分かれる
- 受験生の志向 文低理高・地元志向の継続
- 旧課程生最後の入試
- ・ 大学志願者数は約2万人（2%）減の見込み
- ・ 国公立大志願者数は微減
- ・ 理系受験者の多い科目で平均点上昇
- ・ 難関大・医学科は堅調な人気
- ・ 志願動向に極端な安全志向は見られず

大学入試センター試験概況

○ 18歳人口減少により、志願者・受験者数はともに減少

今年のセンター試験は1月18・19日の2日間にわたり、全国693の試験会場で実施された。志願者数は昨年より12,672人減の560,672人（前年比97.8%）であった。今春は、高校卒業者が前年より4%ほど減少すると見込まれており、センター試験の志願者数・受験者数も前年から2%程度減少した。

○ 平均点：国語、地学Ⅰは過去最低に。理科での科目間差が広がる

昨年は主要教科である「数学Ⅰ・数学A」「国語」が難化、例年になく低い平均点となったが、今年の「国語」は昨年と比べて古文と漢文の平均点が更にダウンしており、100点を下回った（センター試験開始以降最低）。

理科では科目間の平均点差が開き、明暗が分かれた。「化学Ⅰ」で平均点が6点アップ、一方で文系生の選択が多い「生物Ⅰ」「地学Ⅰ」ではダウンした。「化学Ⅰ」と「地学Ⅰ」の平均点差は19.2点。目安となる20点を超えなかったため、得点調整はなかったものの、これだけの平均点差が開いたことには、不公平感を否めない。

○ 総合型平均点：文系・理系で点差が開く

7科目型の平均点は、文系型（900点満点）が534点（+4点）、理系型（900点満点）が566点（+16点）と文理ともに若干アップした。文系と理系の平均点差30点以上は7科目型の集計を始めた2004年度以降、最大である。文系型では、受験者の減少は640点より下の層で起きており、640点以上では昨年とほとんど変わらない。一方、理系型では、特に難関国立大合格の目安となる得点率8割以上の得点者は、前年から3割以上増加している。

国公立大学入試

○ 国公立大志願者総数は約5千人の減少

国公立大一般選抜の総志願者数は、前年から5,252人減少して484,420人であった。今年は高校卒業者数の減少にあたり、志願者数減少はその影響が大きい。志願倍率は4.78倍。国公立大人気自体に大きな変化はない。

○ 難関国立大の志願状況～旧課程最後の入試も安全志向は見られず

難関10大学全体では、前期日程は約1千3百人減（前年比98%）となった。来春入試より新課程入試に移行することから、受験生心理に安全志向が働くことも予想されたが、難関大を極端に敬遠した様子はいかたがえなかった。

○ 学部系統別の志願状況～「文低理高」は継続

近年、学部系統の人気は「文低理高」が続いている。志願者の減少が続いていた「経済・経営・商」学系が増加に転じたものの、「文・人文」「社会・国際」「法・政治」の各学系は3～4%の減少となった。とりわけ減少率が高いのが「教育」学系で、教員養成課程、総合科学課程あわせて志願者前年比92%となった。志願者の減少は特定の大学によるものではなく、全国的なものとなっている。私立大で教育系学部・学科の新設が相次いでいることも要因であろう。

私立大学入試

私立大志願者数は今春入試でも増加

近年、一度の試験で複数学部・学科への出願を可能にする、同時に複数方式に出願すると受験料を割り引くといった、一人あたりの出願校数を増やす仕組みを導入する大学が増えているのも私立大の志願者増の要因であろう。最近広がりを見せるインターネット出願も受験料を引き下げるケースがみられ、志願者増の要因となっている。

大学グループ別の志願状況（前年比）では、「早慶上理」は100%、「MARCH」では96%と減少する一方「関関同立」では101%となった。なお、主な大学グループを除いたその他の大学の志願者数は前年比103%と、私立大全体以上の増加率となっている。今春も比較的入りやすい中堅以下の大学や地方の大学で志願者数が伸びる傾向がみられた。